

	名古屋大学農学部 同窓会報	発行所	名古屋大学農学部同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	富岡利恵・吉岡博文
		発行人	海老原史樹文
		印刷所	株式会社 クイックス

農学部及び生命農学研究科の近況

名古屋大学農学部同窓会 名誉会長 前島正義
(名古屋大学大学院生命農学研究科長・農学部長)



農学部同会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃から農学部ならびに生命農学研究科の教育研究活動にご理解とご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

この春、農学部生180名、生命農学研究科大学院生180名が卒業し、新しい環境の中でそれぞれの第一歩を踏み出すこととなります。一人一人にとって心に張りつめたものを感じつつ巣立っていきます。新しい歩みの先で、同窓会会員の皆様が先達として明かりを灯し、あるいは励まし背中を推していただいています。昨秋、農学部同窓会関西支部の集まりに参加させていただきました。企業のトップあるいは研究所長として活躍されておられる方、厳しい環境の中で生徒たちを育てることに懸命になっておられる方、同窓生の苦境に手を差し伸べて転機を支えておられる方、還暦を過ぎてフランス語やピアノに楽しく挑戦されておられる方等、同窓という縁を大切にしつつ人生を大きく闊歩されている姿に接し、嬉しく、農学部という教育の場の大切さと重さを感じました。

ここに機会を頂きましたので、大学の置かれている状況と最近の名古屋大学、そして農学部を紹介させていただきます。

はじめは、日本の大学が社会から頂いている厳しいご意見の紹介です。たとえば、大学の 대중化により裾野が広がったけれどもトップが大きくは伸びていない、大学院教育はアカデミア偏重となっており企業社会の中で十分に力を発揮できない学生を送り出している、若者人口が減りつつある中で大学の数が多過ぎる、国際化するなかで英語力と視野の広さが不足しているなど、いずれも大学の根本に関わる内容です。大学からみれば、若者を活かしきれないあるいは育てる余裕がない企業社会になってきていることを反映している

とも感じます。そして、こうした批判は大学に対する強い期待の裏返しでもあり、社会の変化のスピードが速く、的確な対応が求められていることの表われでも感じます。国は昨年夏に「大学改革実行プラン」を発表しました。急激な少子高齢化の進行、グローバル化によるボーダーレス化、新興国の台頭による競争激化、東日本大震災等の国難の中で、大学は持続的に発展する活力ある社会に変革するエンジンとしての役割を果たそうと、新たな取り組みが進行しています。財政的には、厳しい競争原理が教育の場にも広がり大学運営に必要な基盤的経費は年々削減され、研究あるいは大学院教育に必要な費用は科学研究費補助金等の競争的外部資金で賄わざるを得ない状況です。

こうした状況の中で、名古屋大学は濱口道成総長の「名古屋大学から Nagoya University へ」に代表される事業が進んでいます。グローバル30プログラムを大きく進め留学生は名大生（学部生と大学院生）の10%を超す状況になりました。入学当初からの英語教育に力を入れ、また名大生を積極的に海外に送り出しています。大学の外部評価として、名古屋大学は世界最先端の優れた研究、地域に根を置きつつ世界に目を向けた教育と研究、的確な広報が行われているとのご意見を頂いています。

農学部・生命農学研究科も大きく変わりつつあります。学部段階での留学生も増え、英語での講義が数多く企画され、英語での学生実験指導も今年秋からスタートします。タイ、カンボジアでの実地研修も実績を積み、今年は濱口総長に現地で学生の活躍と変貌ぶりを見て頂きました。学部での学生実験実習でも新しい機器を導入し実験実習項目を工夫し刷新し、教員が

力を合わせて指導しています。事務部門と協力し就職支援もいねいに実施しています。就職内定率は農学系の中で国内トップであるとの経済新聞社の調査結果もあります。現在、教員数は120名弱ですが、各教員が科学研究費補助金、農林水産省等の研究費、企業から研究助成金を獲得し、高水準の教育と研究を維持できています。こうした研究資金は研究成果の一つの果実でもあり、若い人たちと共に次の成果を産み出す原資ともなっています。

教育と研究の成果と目標に関する厳しい審査を経て、大学院の教育プログラムにも採択され続けています。「環境」をキーワードとするグローバルCOEが締めくくりに迎える一方で、新たにスタートした博士課程教育リーディング大学院「グリーン自然科学国際教育研究プログラム」もあります。このプログラムは理学研究科・工学研究科との共同教育事業として本格的に稼働し、大学院教育の相互乗り入れ、学際的なカリキュラム、実践的英語教育、企業研究所との交流と共同研究の推進、大学院生の海外派遣が進みました。こうしたプロセスで大学院生が何をどのように学び切磋琢磨したかを明示し、教育の質の保証を可視化することにも取り組んでいます。今年度新たに採択された

リーディング大学院プログラム「PhD プロフェッショナル登龍門：フロンティア・アジアの地平に立つリーダーの養成」も大きな一歩を踏み出しています。これらのプログラムは、アカデミア偏重と言われる大学院教育を見直し、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くための事業です。数年後から新しいタイプの卒業生が、同窓生のおられる企業・国公立機関、そして国際機関でも活躍することになります。

この会報がお手元に届く頃には入学試験の合格発表も済み、新しい学生を迎える準備が始まります。農学部は幅広い学問をカバーし、今も人気の高い学部であり続けています。優秀な学生さんを毎年迎えています。大学生は人生にとって掛替えのない時間を大学で過ごします。大学は、専門基礎を学びつつ人の考えを踏襲するのではなく自身が納得できる自らの考えをもち、さまざまな国や文化を理解した上で、互いに相手を尊重し、寛容と主張のできる学生を送り出すことを目標としています。

会員の皆様のますますのご健康とご活躍、そして農学部同窓会の発展を祈念し近況報告といたします。

農学部同窓会会長挨拶

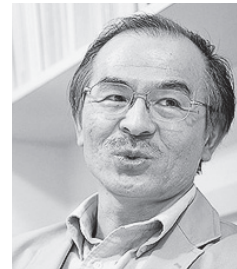
海老原史樹文（昭和48年畜産）

昨年の同窓会報の挨拶に、実験動物学の観点から「心の病」に取り組み始めたこと、私は書きました。農学部では、食・環境・健康に関する諸課題の解決に向けた様々な研究が行われていますが、私の研究は心の健康に関するものです。しかし、一般の認識では、こうした研究は、医学部で行われる研究で、農学部の研究とはおよそかけ離れた研究と思われるがちです。そこで、農学部での研究の裾野の広がりを示す例として、私たちの研究の内容について、もう少し詳しくお話したいと思います。

農学部での動物研究は、有用動物を生産するための学問である畜産学と、生産した動物を治療するための獣医学に分かれます。遺伝子改変動物など、研究で用いるマウスやラットを実験に適したよう改良する分野は、畜産学から派生した実験動物学という学問として確立しています。我が国の実験動物学における遺伝・育種学研究の先達は、私が所属した家畜育種学研究室

（現動物遺伝制御学研究分野）を主宰した近藤恭司教授（故人）です。先生は、近交系マウスの系統育成を

日本で初めて手掛け、疾患モデル動物学の基礎を築かれました。当時の家畜育種学研究室には、数多くの近交系マウスが育成されており、私はそれらのマウスの行動特性を調べ、異常な行動を示すマウスを見出しました。それ以来、異常行動マウスを用いた研究を続けていますが、比較的最近になって、異常行動の原因となる遺伝子を明らかにすることに成功しました。マウスの行動を調べるのは、行動観察からマウスの心理を評価し、ヒトの精神疾患のモデルマウスとして活用できると考えているからです。ヒトの感情がマウスで評価できるかという疑問もありますが、動物にも恐怖や不安のような情動（感情）があり、その脳内機序には共通点があると多くの研究者が考えています。私たち



が見出した遺伝子は、情動行動に影響を与えますが、それ以外にも養育行動の低下を引き起こします。養育行動は子の生後発達のために極めて重要であり、ラットやマウスでは、養育期に慢性的ストレスにさらされると成長後の情動行動が障害されます。ヒトにおいても同様で、最近深刻な社会問題となっている児童虐待は、子供の将来にわたって継続的に影響を及ぼし、虐待を受けた児童の成長後の犯罪率の高さ、うつ病などの精神疾患発症率の増加など極めて重大な影響を児童に与えるとされています。こうした問題を生物学的観点から解決するために児童虐待の動物モデルとしてこのマウスを活用したいと考えています。動物に関する総合的教育・研究の場合は、日本では農学部にはありません。今後、様々な観点からの動物研究が一層発展することを期待したいものです。

ところで、最近農学部に関連する新聞記事を二つ目に行きました。一つは、農学部の新設に関する記事です。環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）交渉参加が議論されている中、「強い農業」を担う人材育成を目指して農学部を新設する動きが広がっているとの記事です。TPPへの参加については様々な議論があると思いますが、食の安全・安心、環境の保全と修復、健康を

支える基礎科学を担う農学部の役割は、今後ますます重要になってくることは間違いありません。農学部の新設は、35年ぶりのことで、農学部を身を置くものとしてはうれしい話です。もう一つの記事は、大学院進学率の低下の記事です。大学院への進学率は年々低下する傾向にあります。特に、修士課程から博士課程への進学率が急激に低下しており、これからの我が国の研究水準の維持発展を考えると深刻な問題です。進学率の低下は、農学に限らず自然科学系大学院に共通しており、特に理学と農学の低下が際立っています。理学では、1991年に博士課程進学率が31.1%であったものが、2010年には19.9%、農学では22.5%から14.4%に減少しています。実際、本研究科においても博士課程への進学者が減少しており、頭の痛い話です。大学教員数の削減に加え、選択と集中による競争的資金の投入で短期的成果を求められるために、それを担う任期付の研究者ばかりが増える状況です。このような状況では、夢を持って研究者になろうと思う学生が増えないのは当然で、将来の日本の科学技術の前途が非常に心配になります。安倍新政権が目指す教育改革において、科学技術を担う研究者の育成についても積極的に眼を向けてくれることを期待したいものです。

平成25年度名古屋大学農学部同窓会、総会、講演会、懇親会のご案内

平成25年度名古屋大学農学部同窓会、総会、講演会、懇親会を下記の日程で開催します。皆様お誘い合わせの上、ふるってご参加ください。講演会、懇親会へのみの参加も歓迎いたします。

○期 日：平成25年6月8日（土）*名大祭期間中*

○総 会

時間：午後2時～3時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○講演会

JA あいち経済連 営農支援センター

永井雄太郎 氏 第34回（昭和63年3月）農学部農芸化学科卒

「残留農薬分析 ―その方法と農産物の安全安心対策における役割―」

近年、分析装置の性能が向上したことで、残留農薬分析の方法は大幅に簡略化されてきている。演者がJAの分析担当者として経験してきた分析方法の変遷について解説するとともに、農産物の安全安心を確保する上で、残留農薬分析が果たす役割について紹介する。

時間：午後3時～4時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○懇親会

時間：午後4時30分～6時30分

場所：名古屋大学内 “レストラン花の木”

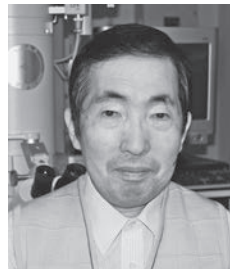
会費：1,000円

同窓会を開きませんか!?

農学部同窓会を機に、久しぶりに農学部に集まって同窓会を開催しませんか？農学部同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。是非、同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）まで事前にご連絡ください。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用いただくこともできます。

電子顕微鏡とともに

資源植物環境学 三宅 博



1991年に農学部共通講座資源生物環境学講座(現在の生命農学研究科資源植物環境学研究分野)に赴任して以来、22年間にわたり名古屋大学に勤めさせていただきました。また1972年から8年間、農学研究科に大学院生、研究生として在籍しました。学部は東京農工大学農学部植物防疫学科(現在応用生物科学科に編入)を卒業しております。したがって名大と農工大の両方に同窓会費を納めています。

大学院生時代はおもに電子顕微鏡を用いて、イネ科植物の葉緑体の多様性と成長にともなう構造変化について研究を行いました。大学院修了後は就職が無くて、奨励研究員や研究生をやって、3年後の1980年に、東京農工大学農学部環境保護学科(現在の環境資源科学科)に助手として採用されました。農工大では大気汚染や酸性雨が植物に及ぼす影響や、植物を用いた環境浄化など、生理生態学的な研究を行っておりました。しかし大学院生時代に身につけた電子顕微鏡技術を生かした研究を行いたいと考え、11年後に名古屋大学に転任しました。名古屋大学では塩ストレスなど、環境ストレスが植物に及ぼす影響について電子顕微鏡を用いた研究を行いました。そして多くの学生、大学院生の協力を得て、塩ストレスによる葉緑体の障害は塩そのものの作用ではなく、光合成の過程で発生する活性酸素、特に過酸化水素とヒドロキシルラジカルの作用であることを明らかにすることができました。

大学院生時代には、硬い細胞壁を持つイネ科植物から電子顕微鏡観察のための超薄切片を作製する技術は確立しておらず、大変苦労しました。何年もかかって、包埋する際に組織から脱水に用いた溶媒を完全に除去することがコツであることを突き止めました。今では誰でも簡単に超薄切片を作製できるようになったと思います。現在研究室に来る学生は、1週間も経つと超薄切片を作製できるようになり、「電顕のどこが難しいの？」という顔をしているので少し悔しい気もしま

すが、これが学問の進歩だと思います。もはや超薄切片法は特殊な技術ではなく単なる手段です。若手の皆さんは確立した技術は手段として利用して、現在の研究において直面する新しい課題に果敢に取り組んで下さい。

同窓会に関しては、名古屋大学に赴任した直後の数年間、会計と会計監査を務めさせていただきました。当時の同窓会会計は自転車操業で、毎年見かけ上多額の繰越金が出ていますが、実は翌年3月に会報が発行されて会費納入のお願いをして会費が納入されるまで、ほとんど収入はありません。それまでに会報印刷など多額の支出があり、年末には繰越金が底をついて会計担当者がポケットマネーを投入するという事態になります。このお金は会報が発行されて会費が納入されると回収できるのですが、はなはだ不健全な運営です。そこで会員録発行の前年に当たった年に、会員録購入の予約を受け付けて、予約金をプールして毎年末の運転資金にしようと考えました。このようにして予算案を作成して総会にかけたところ、民間企業に勤める会員のかたより、そのようなことをすると収益と見なされて同窓会が課税対象になると指摘され、あわてて従来の自転車操業的予算に組み換えました。ふだん大学の中だけで生活をしているので税金のことなど考えてもみなかったな、と自らの見識の狭さを恥じたものでした。いろいろな職種の方と情報交換することができるのも同窓会のメリットの一つです。現在の同窓会の会計状態はいかがでしょう。役員の皆様のご苦労お察しします。頑張ってください。

皆様、長い間大変お世話になりました。生命農学研究科と同窓会のますますの発展を心より願っております。

定年退職技術職員

今年度はこのほか1名の技術職員の方が定年退職されます。辻本隆司さん、長い間技術支援ありがとうございました。

良き師、良き友、良き後輩との出会いに感謝

資源昆虫学 柳沼利信



岩手大学に昭和44（1969）年4月に入学、さらに修士課程を修了し、その後（昭和50（1975）年4月）、名古屋大学大学院農学研究科の博士課程に移る。盛岡を去る際に、所属していた応用昆虫学研究室の宮慶一郎教授から「ここで学んだ形態発生の見方・考え方を忘れないように」という餞の言葉を頂いた。

博士課程先の養蚕学研究室の長谷川金作教授を訪ねると、「私はある意味では研究の時流に乗り遅れたように思う。これからの若い人たちは、実験を進める上での方法論・分析法を自分で創っていく位でないと新しい知見は得られない」と語られた。長谷川先生はその年の3月で定年退官され、その後、川瀬茂実先生が教授に、山下興亜先生が助教授になられた。同じ年の5月のゴールデンウィークの時に、ガラス器具を洗浄していると、山下先生が「岩手大学の先生方に近況などの報告の手紙を出したか？」と言われる。「まだですが」と答え、「いけない。良き研究者は良き人間でないと。すぐに近況を知らせるように」と。

養蚕学研究室の雰囲気は、その時代を反映してか、ゼミなどでも、教官、先輩、後輩の区別はなく、自由に言い合い、実験・研究至上主義というか、実験・研究が進んでいるものに敬意が払われた。当初一番驚いたのは、先輩が見せてくれた冷凍庫から取り出した缶であった。中にはベーリンガーマンハイム社製の糖代謝系の基質・中間体と関連酵素や補酵素が全て特級試薬（最大包装）として揃っていることであった。

昭和55（1980）年1月から幸いにして助手に採用された。この年の夏、国際昆虫学会議が京都で開催された。養蚕学研究室の看板である「休眠ホルモン」の構造決定研究が一つの山場にあった。共同研究の食品有機化学研究室の後藤俊夫教授が「好きな試薬どんどん購入し仕事を進めてください。あなた方も将来後輩の面倒を宜しく」等と檄を飛ばされた。

昭和59（1984）年5月から米国の州立バーモント大学の動物部門のHapp教授の元に約2年間留学の機会を得た。「2月末に来てくれ」というテレックスが理学部に届き、農学部で学内便で転送される時代である。交渉するのに、現在とは異なり、色々と面倒で

あった。この過程で、害虫学研究室の斎藤哲夫教授（当時学部長）が、「面倒を見るというのは最後まで見ることで、途中で止めるなら最初から手を出さない」と、山下先生を叱咤されたのには冷汗ものであった。この渡航の話には余談があって、成田からシアトル経由シカゴ、シカゴからバーモント州バーリントンへの飛行予定であった。近畿ツーリストの予定表にはバーリントンが最終空港と記載されていたので寝ていた。所が、便はバーリントン経由の東海岸ポートランド終点に変更されていた。私は着いた所がバーリントンと思い込んでいるので、荷物が出てこないのを不審に思い受付に行くと、係員が「電話が入っている」という。Happ教授で、「荷物が出てきたが、肝心の人間が出てこない。お前は何処にいるのか?」。そこで、初めてover-flightしたことに気がついた。教授夫人の「flightの英語が聞き取れない人間を雇って大丈夫か?」という懸念に、Happ教授は「サイエンスは国境を越えるので言葉の問題ではない」と答えていたと後に他のポストクに聞かされた。

研究室名は「資源昆虫学」と変更、山下先生が教授になられた。その後、学部・大学院・学部改組があり、あっという間に時間が過ぎてしまった感がある。博士課程から一貫して「カイコの胚休眠研究」に専念することが出来たことは、諸先輩、同僚、後輩及び学生さん達との良き出会いのお陰である。院生時代から約38年間（教官・教員期間33年間）名古屋大学農学部・生命農学研究科にお世話になったことになる。

そういえば、助手になったとたん、農学部同窓会の会計を仰せ付かったことがある。「私は博士課程しか名古屋大学大学院農学研究科に在籍していませんので農学部同窓生ではありませんが」と言うと、作物学研究室の河野恭広先生と先の斎藤先生が「それが名古屋大学農学部の良い所で、同窓生として歓迎する」とのことであった。何だかだまされたようにも感じながら、それがこの学部・大学院の良き風潮と思ったものである。

卒業生の言葉

4年間の思い出

生物環境科学科 森林環境資源学研究分野 岩瀬 香
慣れない土地での生活が始まってすぐ、大学という自主性の高い環境におかれ、初めは戸惑っていたことをよく覚えています。しかし、同学年の友人やサークルの仲間たちに恵まれたおかげで、楽しく充実した大学生活を送ることができました。

1、2年生のときは、初めての履修登録や教室を探すことに必死になり、家に帰れば慣れない家事に追われというドタバタした生活を送っていました。そのような中でもいくつかサークルに所属し、アルバイトも掛け持ちで行って、学校では学べない社会でのルールや一般常識を学ぶことができました。

やっと大学生活に慣れた3年生で、まさかこんなにも森の中に分け入る機会が多いとは思っていませんでした。初めはためらってしまいましたが、仲間のみなど協力して実験を行い、教え合い、時には川に入っではしゃいだり遊んだりして、自然の良さ、同時にこの自然を守っていく、または有効活用していくため

に私は農学部に入ったのだと実感することができました。

そのような思いが強まった頃、4年生に上がり研究室で卒業研究が始まりました。実験は好きでしたが、初めて自主的に実験を行わなければならない、実験の計画を立てることや実験方法を考えることの大変さを知りました。しかし、このような場でなければ扱えない実験器具や様々な機械を使うことができ、とても貴重な体験ができました。

この4年間で、大学という場は、専門知識を学ぶことのできる場であることはもちろん、自分で視野を広げればいくらかでも学ぶことのできる面白い場であると感じました。そのように感じたのも、私の意思を第一に尊重し自由に行動させてくれた両親をはじめ、いろいろな考え方、世界があることを教えてくれた友人達、最先端の研究に触れさせていただいた先生方や先輩方のおかげであると感じています。この4年間で得られたことを胸に、社会で活躍していきたいと思います。本当にありがとうございました。



挑 戦

資源生物科学科 園芸科学研究分野 阪本 浩嗣
県外から入学した私にとって、この4年間は様々な挑戦の連続でした。その中での一つに硬式テニス部での活動があります。高校時代にまともに体育会の部活動に取り組んだ経験のなかった私にとって、レギュラーを目指して努力を重ねたことが大学生活最大の挑

戦でした。レベルの高い名古屋大学でレギュラーになるのは難しく、毎日厳しい練習を続けましたが最初の2年間はチャンスを掴むことができませんでした。また部活動には楽しいことだけでなくつらいこともたくさんあり、時には、「やめてしまいたい」と思うこともありました。しかし、諦めたら一生後悔すると思い、一層の努力を重ねました。こうして積み重ねた努力の結果、3年生になってようやくレギュラーとなること

ができ、さらにレギュラーとして出場した七帝戦ではチームの優勝に貢献することができました。このことは一生忘れない思い出になりました。

部員全員がお互いを師として教えあい、批評し合い、切磋琢磨する硬式テニス部での毎日の活動は、自分自身の成長へとつながる本当に大切な経験でした。テニス部を引退した時、こんな素晴らしい環境にはめったに出会えないと思いましたが、幸運なことに新たな出会いがありました。4年生で配属された園芸科学研究室です。厳しいことを言われることも多く、忙しい毎日ですが、分け隔てなく意見を言い合える環境があり、

与えられたテーマに対して日々奮闘しています。

4年間で学んだことは、「楽しい道は決して楽な道ではない」ということです。硬式テニス部や研究室での活動を通して、目の前の困難からすぐに逃げず、大きな目標に向かって努力する大切さを学びました。私は卒業後、大学院へと進学します。今よりさらに厳しい環境が待ち受けているでしょうが、大学4年間で学んだことを胸に、私は挑戦していきたいと思います。

最後に、この4年間ともに切磋琢磨してきた友人、ご指導頂いた先生方、様々な挑戦を応援してくれた家族に感謝申し上げます。



四年間を思い返して

応用生命科学科 生体高分子学研究分野 森 健
名古屋大学に入学して、あっという間に四年間が過ぎました。進学するためなのかもしれませんが、まだ、大学を卒業してしまうという実感が湧いてきません。初めての一人暮らし、慣れない街、大学の講義、新しい友達といったフレッシュなものに囲まれた時に感じた期待感は今でもごく最近の事に感じられます。

私は中学高校とバスケットボール部に所属していたということもあり、部活動に入らないにしても続けてみたかったので、農学部の学生で構成されたバスケットボールサークルに参加しました。学部内ということで、学科内の先輩、後輩という縦のつながりだけではなく違う学科との横のつながりもでき、進学、就職してもずっと付き合いを続けていきたいと思えるような友人もできました。

また、アルバイトにも取り組むことができました。昔から映画が大好きだったこともあり、映画館での仕事を探したところ、幸運なことに映写室での仕事をす

ることができました。好きな映画に囲まれ、フィルムを扱うといった責任のある仕事をするのもできたのでとても貴重な経験になりました。

4年生になると、研究室に配属され、これまでのただ座って講義を聴くだけの生活から、自分で行動して研究するという生活に一変しました。自分で研究するようになってはじめて、それまでの講義の意味や面白さに気づくことができました。最初はもちろん実験はへたくそでしたが、先生や先輩方にサポートして頂いた結果、少しでも上達できていたら嬉しいです。

最後になりましたが、四年間サークルと一緒に楽しく過ごしてくれた友人や、先輩後輩、研究室でご指導くださった先生方、先輩方、いつも楽しく遊んでくれ、切磋琢磨し、目標になってくれた同期、自分の好きなようにしなさいと言ってあたたかく送り出し、見守ってくれた家族に深く感謝申し上げます。卒業と言えどこのまま大学院に進学するのですぐにはそれほど大きな変化はありませんが、これからも変わらず、欲を言えば今まで以上に応援していただければ幸いです。



おかげさまで

生物圏資源学専攻 循環資源利用学研究分野 石垣拓実

たとえば「充実した6年間の大学生活」という見出しに続いて文章を書き始めるのなら、私の頭に抵抗なく去来するものは、本学交響楽団に5年間身を置き、演奏旅行の指揮者を務めた事、運営長として組織を束ねた事。あるいは、所属した研究室において、一人ひとりの良さを最大限に引き出そうとしてくださる素晴らしい恩師の下、若さ故の背伸びした野心や努力を以てして研究に励んできた事。そして、損得勘定の鎧など脱ぎさり、ありのまま同士で付き合えた仲間達との思い出。そういった事が挙げられます。

自身の来歴を披露する段には、こんなふうには、得てして人前向きに衣装を着せたトピックばかり先行させがちですが、私の実相を言い表すのにより相応しいのは、むしろ日陰に隠れた、挙げればキリのない「無駄」や「煩惱」や「失態」だったというのが、正直な言い方です。そしてそんな至らぬ所ばかりの私を、見守り、

叱咤し、支えてくださった方々への、言葉にならない感謝の気持ちの方が、今となっては、何を成し遂げ、どんな苦勞をしてどう感じたか、という往相の感覚などより遥かに大きいというのが、ほんとうです。

私はそういった方々に生まれ、大学一年の時点より、精神的に随分と遠い地点まで辿り着けた気がします。たとえば子供の頃にあんなに広く感じたはずの、学び舎だとか、公園だとか、そのいちいちが、大人となり再び訪れる時には狭く感じてしまうというように、大学生活における往きがけの道中で見て感じた事のすべて、卒業の瀬を迎える今となっては「小さくなんでもない事だった」と素朴な懐かしさが滲んできます。驕りも粹がりもせず言うなれば、そんな過去と現在の感覚の異和は、自分がどれほど変わってゆけたかの指標でもあり、そのような変化の機会を与えてくれたのは本学における出会いのすべてだと感じます。だからこそ、誰でもない誰かに向けて、私はこう言いたいと思います。「おかげさまで」と。



平成24年度総会、講演会、懇親会、ならびに農学部第8回卒業生 および修士第6回卒業生の卒業50周年記念祝賀会の報告

平成24年6月9日(土)、農学部第3講義室において総会を行いました。平成23年の事業・決算報告を行った後、平成23年度役員を選出し、平成24年度事業計画・予算を審議しました。総会終了後、青山博昭氏((財)残留農薬研究所 毒性部長)による講演「内分泌かく乱物質問題の顛末」を開催しました。講演終了後、「レストラン花の木」にて懇親会を開催し親睦を深めました。

同日、名古屋大学農学部大会議室において、農学部第8回卒業生および修士第6回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を、農学部談話会と共同で開催しました。平成17年に始まったこの祝賀会も8回目を迎え、8名の卒業生と21名の談話会会員、19名の現職員ならびに同

窓会役員が出席して盛大に行われました。祝賀会では、出席いただいた方々からの近況報告に続き、談話会会員の武岡洋治名誉教授(資源植物環境学研究分野)による記念講演「環境ストレスとイネの生殖戦略」も行われ、互いの旧交を温めておられました。

農学部第9回卒業生ならびに大学院第7回修了生の卒業50周年記念祝賀会は、平成25年6月8日(土)に開催する予定です。懐かしい先生方にもご参加いただけるかと思いますので、記念祝賀会へのご招待状が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。祝賀会、講演会、懇親会に関する情報は農学部同窓会ホームページに掲載中です。是非ご覧ください。

第9回卒業生および修士第7回卒業生の 卒業50周年記念祝賀会の案内

農学部第9回卒業生ならびに大学院農学研究科第7回修了生(昭和38年卒業・修了)のみなさんが、平成25年3月に卒業50周年を迎えられます。この良き年を記念して、農学部談話会にもご協力いただき、第9回卒業50周年記念祝賀会を開催いたします。懐かしい先生方にもご参加いただけるかと思いますので、記念祝賀会へのご招待状が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

農学部第8回卒業生のみなさんからの寄稿

セコイア・メタセコイア・落羽松(ヌマスギ)

浅井 武重 (昭和37年農化(栄化)卒)

「第8回農学部卒業50周年記念祝賀会」お世話になりました。「セコイア・メタセコイア・落羽松(ヌマスギ)」を一筆ここにお届けします。

メタセコイアとよく似ていて常緑樹のセコイアが「ランの館」(名古屋市の久屋大通公園の南)の庭にもあります。セコイアの回りにはヌマスギ(落羽松)が植えてあり、秋、ヌマスギの黄葉・落葉のころは、またすばらしい眺めになります。

ヌマスギはメタセコイアと違い「気根」を出すので、庭の通路に出た気根は切除されます。ほかの気根は見られます。

名古屋・熱田にあるファインセラミックセンターの東にある「神宮東公園」には、ヌマスギとメタセコイアのかんりの本数の植樹が別々に見られます。どちらがメタセコイアか分かりますか!!

「第8回農学部卒業50周年記念祝賀会」に参加して

多賀 正明 (昭和37年農(園芸)卒)

先般は心暖かなおもてなしを頂きありがとうございました。お蔭様で、50年ぶりに懐かしい同窓生に会うことが出来ました。卒業すれば、縁のない遠い存在になってしまう大学でしたが、今回お招きいただき、母校としての身近な存在になりました。開かれた大学として、卒業生が更に自由に交流のできる場にしていただければ幸いです。

現在は樹木医として、貴重な巨樹・古木などの天然記念物の保全に従事していますが、樹木医学の発展に母校の先生方が寄与していただければ幸いです。

平成24年度名古屋大学農学部学術交流基金助成事業の採択者一覧
(農学部学術交流基金助成は農学部創立50周年記念事業の一環として行われています。)

○「研究集会」

- ・山田 容三 (准教授)

研究題目等：IUFRO RG3. 03国際ワークショップーこれからの森林・林業における労働科学的チャレンジー

○「海外派遣」

- ・渡邊 健史 (助教)

研究題目等：第14回 国際微生物生態学シンポジウムでの成果発表

人事異動 (平成 24 年 1 月～ 12 月まで)

日付	内容	職名	氏名	備考
H24.1.1	昇格	准教授	野村 信嘉	助教から
H24.2.16	採用	助教	青木 弾	
H24.3.16	〃	〃	松尾 美幸	
H24.3.31	定年退職		服部 重昭	
H24.3.31	〃		小林 迪弘	
H24.3.31	〃		木村 真人	
H24.4.1	兼務	研究科長	前島 正義	24.4.1～26.3.31
H24.4.1	〃	教育研究評議会評議員	柘植 尚志	24.4.1～25.3.31
H24.4.1	〃	副研究科長	柘植 尚志	24.4.1～25.3.31
H24.4.1	〃	〃	肘井 直樹	24.4.1～26.3.31
H24.4.1	〃	センター長	松田 洋一	24.4.1～27.3.31
H24.4.1	昇格	教授	饗場 浩文	創薬科学研究科へ
H24.4.1	〃	〃	人見 清隆	創薬科学研究科へ
H24.4.1	〃	准教授	松田 二子	助教から
H24.4.1	採用	〃	阿部 秀樹	東京大学大学院理学研究科から
H24.4.1	〃	助教	太田垣駿吾	
H24.4.9	死亡退職	－	坂神 洋次	
H24.6.30	退職	－	前多敬一郎	東京大学大学院農学生命科学研究科教授へ
H24.10.1	採用	准教授	MATURANA Andres Daniel	長岡技術科学大学工学部から

農学部同窓会ホームページ案内

祝賀会、講演会、懇親会の模様、農学部研究室の変遷などに関する情報は農学部同窓会ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>)に掲載中です。住所変更の案内もございます。是非ご覧ください。

平成23年度 事業報告

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成23年6月4日、名古屋大学農学部において総会を行った。総会終了後、松本光朗氏（(独)森林総合研究所 研究コーディネータ・REDD 研究開発センター長）による講演「地球温暖化対策としての森林経営・木材利用」を開催した。講演会終了後、名古屋大学内“花の木”にて懇親会を開催し、親睦を深めた。
- 2) 卒業生・修了生を送る会の開催
平成24年3月26日に農学部談話室にて卒業生・修了生を送る会を開催した。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成24年3月に発行した。
- 4) 農学部同窓会50周年記念事業～卒業50周年記念祝賀会の開催～
平成24年6月9日、名古屋大学農学部大会議室において第8回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を農学部談話室と共同で開催した。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページの充実をはかった。
- 6) 同窓会名簿の管理
同窓会名簿の更新を行うとともに、名簿情報の提供を行った。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事に役員を出し、運営に協力した。

平成24年度 事業計画

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成24年6月9日、名古屋大学農学部において総会を行う。総会終了後、青山博昭氏（(財)残留農薬研究所 毒性部長）による講演「内分泌かく乱物質問題の顛末」を開催する。講演会終了後、名古屋大学内レストラン“花の木”にて懇親会を開催する。
- 2) 卒業祝賀会の開催
平成25年3月25日に農学部談話室にて卒業・修了祝賀会を開催予定。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成25年3月発行予定。
- 4) 卒業50周年記念祝賀会の開催
第9回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を開催予定。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に、同窓会ホームページの充実をはかる。
- 6) 同窓会名簿の発行および管理
全学同窓会の名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努める。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事に役員を出し、運営に協力する。

名古屋大学農学部同窓会 平成23年度決算

【収入の部】

費 目	決 算 (円)	細 目	金 額 (円)	備 考
会 費 等	2,072,000	永 久 会 費	1,240,000	62名
		一 般 会 費	410,000	82名
		寄 付 金	377,000	76名
		広 告 掲 載 費	45,000	3件
卒業50周年祝賀会費	100,000		100,000	50名
総会懇親会費	33,000		33,000	33名
前年度繰越金	25,787,924			
合 計	27,992,924			
	(実質収入2,205,000)			

(12) 平成25年 3月22日

セコイア通信

【支出の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,165,715	会報印刷・発送 振込手数料	1,164,035 1,680	9,000部 2件
総会	231,500	講師講演料 講師交通費 役員交通費 懇親会費 事務費	30,000 26,000 40,500 131,000 4,000	3名 総会資料作成
卒業50周年祝賀会	108,918	飲食代 事務費	71,000 37,918	案内状印刷・発送
卒業・修了祝賀会	277,935	飲食代 記念品代・発送 振込手数料	102,000 175,095 840	1件
役員報酬	132,630	役員報酬 振込手数料	132,000 630	11名 1件
支部支援金	91,680	関東支部 関西支部 振込手数料	60,000 30,000 1,680	2件
名簿管理	13,119	データ投入料 振込手数料	12,489 630	1件
アルバイト代	250,000		250,000	事務補助
郵便振替手数料	23,360		23,360	
その他諸費用	25,760	交通費 課税納付 年会費過払い返金 振込手数料	1,500 19,120 5,000 140	理事会参加 役員報酬・交通費・事務補助
次年度繰越金	25,672,307			
合計	27,992,924			(実質支出2,320,617)

名古屋大学農学部同窓会 平成24年度予算

【収入の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会費等	2,280,000	永一般会費 一般会費 寄付金 広告掲載費	1,400,000 400,000 420,000 60,000	70名 80名 70名 4件
卒業50周年祝賀会・ 談話会会費	100,000			50名
総会懇親会費	25,000			25名
前年度繰越金	25,672,307			
合計	28,077,307			

【支出の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,200,000			9,000部
総会	246,000	講演料 講師交通費 役員交通費 懇親会費	30,000 26,000 40,000 150,000	3名
卒業50周年祝賀会	110,000	飲食代 事務費	70,000 40,000	印刷・発送
卒業祝賀会	300,000	飲食代 記念品代	130,000 170,000	
役員報酬	132,000		12,000	11名
支部支援金	90,000	関東支部 関西支部	60,000 30,000	平成24年度分 平成24年度分
名簿管理	50,000			
アルバイト代	250,000			事務補助
郵便振替手数料	30,000			
その他諸費用	80,000	役員交通費(理事会) 課税納付 振込手数料 事務費	30,000 20,000 10,000 20,000	役員報酬・交通費・アルバイト代 発送、コピー
余剰金	25,589,307			
合計	28,077,307			

料行政財団によって世界最高と評されているが、曲の中程、彼女が世界平和への祈りを込めて静かに弾く場面では、涙しながら聴き入っていた参加者も複数いた。

コンサート後は、寺島先生ご夫妻と玉藻さんを中心に全員で記念写真を撮影し懇親会に入った。先生を囲み談笑する林産化学卒業生の輪は絶えず、総務会事務局としては、先生に十分に飲食していただけなかったことだけが気がかりであった。



次回第16回総会は、本年11月9日(土)13:30~17:30 学生会館302号室で開催の予定である。また関東方面への就職・異動・転居や問い合わせ等は、下記メールアドレスまでご連絡いただきたい。

名古屋大学農学部同窓会関東支部

E-mail: alum-kan@agr.nagoya-u.ac.jp

関西支部だより

加藤 寿郎 (S45農 M)

関西支部は、発足以来毎年秋に総会を開いておりますが、平成24年度は、11月10日、大阪弥生会館で第8回総会として開催することができました。本年度は、名古屋大学大学院農学研究科長および農学部長の前島正義先生にお越しいただき、総勢18名の会となりました。関西二府四県には、名簿上800名を超える農学部同窓生がいらっしゃいますので、参加者の輪をもっと広げたいと工夫しておりますが、目標をする30名越えには、なお至らない状況が続いております。それでも、毎年、初めて参加される方が数名おられ、本年も2名の方に初めて参加いただきました。初めての方にも、とても和やかな雰囲気の中で、すぐに会に打ち解けていただきました。

総会議事として、会計報告や組織運営のご相談をさせていただいた後、お迎えした前島先生にご講演をいただきました。まず、「遅しく伸びる農学部・生命農学研究科」と題しまして、大学の近況をお話いただいたあと、ご専門の「植物の生体膜ではたらくエネル

ギー・情報変換分子と物質輸送装置」のご解説をいただきました。大学の近況のお話では、大学予算が毎年削減され、厳しい運営を余儀なくされている状況や、厳しい環境にあっても、科研費などを活用し、研究の発展に尽くしておられる様子を伺いました。また、専門のご研究のお話では、生体膜の物質輸送装置、特に水分子と水素イオンの輸送についてご説明いただきました。浅学の小生には、水分子なんぞは単に拡散して生体膜を通過しているだけとぼんやり考えていましたが、アクアポリンというたんぱく質が輸送を制御していると聞き、びっくりいたしました。また、水素イオンの輸送を制御するプロトンピロフォスファターゼという酵素があると伺って、生命の不思議に改めて接した感じがいたしました。

ご講演のあと、例年通りの懇親会ですが、関西支部の懇親会は約3時間と長丁場です。参加された方、みなさん全員に近況報告をいただいておりますため、3時間くらいはすぐに過ぎてしまいます。農学部出身という共通項はありますが、みなさん、様々な分野で活躍され、様々なご経験をお持ちですから、いろいろなお話が聞けて、とても楽しい、有意義な行事として、この会に定着しております。会の終わりには、みなさん、すっかり意気投合し来年の再開を約束してお開きとなりました。



平成25年度の関西支部第9回総会は、11月9日(土)10:00~15:00、大阪弥生会館での開催を予定しております。初めての方でも是非ふるってご参加のほど、お願い申し上げます。次回の総会では、「サツマイモエネルギーは日本を救う」と訴えてご活躍中の鈴木高広先生にお越しいただきまして、ご講演をお願いする予定にしております。先生は、名古屋大学農学部を1983年に卒業のあと、88年に博士課程を修了され、海外も含めご活躍の後、現在は近畿大学生物理工学部の教授でいらっしゃいます。サツマイモの低コスト路地栽培によって芋エネルギーを産業技術に活用し

ようと取り組んでおられ、その活躍ぶりはマスコミでも取り上げられております。

楽しいお話を皆さんと一緒に聞かせていただきましょう。ご来場をお待ちいたしております。

名大遠州会だより

佐々木 健 (H5畜産)

名大遠州会は、静岡県西部(大井川以西)に居住または勤務する名古屋大学、大学院若しくはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、総会を隔年で開催しています。平成24年は、第9回総会と第17回同窓会を6月16日(土)18時に浜松オークラクトシティホテルに82名の会員が集い、名古屋から濱口総長、伊藤全学同窓会代表幹事の来賓をお迎えして開催しました。

総会では、平成22、23年度の事業報告、会計報告の審議、承認、同時に新役員の選出、承認が行なわれました。議事終了後、来賓の濱口総長、伊藤代表幹事の御二方から挨拶がありました。この総会の様子は静岡新聞と中日新聞の取材があり、後日両紙に名大遠州会第17回同窓会として掲載されました。

総会終了後、場所を宴会場に移し、卒業年代の近いグループで指定されたテーブルにつき、大久保名誉会長の乾杯の発声で懇親会を開始しました。ルバン市川さんのテナーサックス演奏をバックにして、世代と学部を越えた幅広い交流が盛んに行われ、和気あいあいとした雰囲気の中で懇親会は大いに盛り上がりました。

そして最後に集合写真を撮影し、来年の同窓会への出席を皆で約束し、21時前に懇親会は終了となりました。



さて、本年は第18回同窓会をオークラクトシティ

ホテル浜松にて、6月15日(土)18:00に開催(17:30受付)予定です。4月上旬頃に案内状を郵送しますので、奮っての御参加をお願いいたします。

連絡先: 遠州会農学部幹事 佐々木健

〒431-3192 浜松市東区半田山1-20-1

浜松医科大学 解剖学講座 神経機能学分野

Tel: 053-435-2293 Fax: 053-435-2290

Email: tsasaki@hama-med.ac.jp

農学部談話会便り

今回紹介いたします“農学部談話会”は平成14年に農学部OB同志の親睦、現役との交流をはかるために気軽に歓談する機会をとの趣旨で名誉教授を中心に発足しました。会員は農学部内に在籍した教員・職員および農学部長(研究科長)を会員としていますが、この輪を同窓生にも広げ、農学部と親しむ会として発展できればと願っています。このところ毎年3月と11月の初旬の金曜日夕刻に、また6月には同窓会と共催し、農学部・生命農学研究科の現状、および話題提供者の講演を柱に談話会を開催しています。話題はできるだけ時宜を得たものと心がけており、今年の6月の第34回談話会を以下のように開催します。

同窓生諸氏の積極的なご参加をお待ちします。

記

第34回 農学部談話会・農学部卒業50周年記念祝賀会

日 時: 6月8日(土)、11:30から13:30

場 所: 名古屋大学農学部大会議室

会 費: 昼食代を含め2千円

プログラム:

農学部の近況 前島正義生命農学研究科長

講演者 名古屋大学研究推進室 渡辺正実教授

なお、談話会についての御問合せなどは談話会世話人代表の杉山達夫(〒470-0131 日進市岩崎町岩根227、電話 0561-73-5568、E-mail cedertree@nifty.com)までお寄せ下さい。

農学部の話題 —2012.01.01 ~ 2012.12.31—

(「名大トピックス」より許可を得て農学部関係の一部を記載)

- 竹中千里生命農学研究科教授は平成23年度環境保全功労者等環境大臣章受章 2012.1.13読売
- 下村吉治生命農学研究科教授らは2種類の資質分子を混合しがん細胞を殺す方法を発見 2012.1.20日刊工業
- 福島和彦生命農学研究科教授らの研究グループは木質バイオマス成分の構造・分布を同時測定できる技術を開発
2012.2.6日刊工業
- 福島和彦生命農学研究科教授らは「リグニン」を観察する新たな技術を開発 2012.2.11中日(朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授が審査委員長を務める第71回中日農業省の贈呈式が開催された
2012.2.29中日(朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授が富士重夫氏全国農業協同組合中央会専務理事と対談 2012.3.4日経(朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授が第49回読売農学賞受賞 2012.3.4読売
- 生源寺眞一生命農学研究科教授が被災地の農業再生について語る 2012.3.4読売
- 梶村恒生命農学研究科准教授が第21回 Spcafe「怖い? 楽しい? 昆虫と微生物の共生」で講演
2012.3.15中日(朝刊)
- 束村博子生命農学研究科准教授らのグループはエストロゲンが脳に働きかけ排卵を促進する仕組みを明らかにした
2012.4.10毎日(朝刊) 中日(朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授は一般社団法人「アグリフューチャー・ジャパン」が開設する「日本農業経営大学校」
の講師を務める 2012.4.24読売
- 叙位叙勲 従四位瑞宝中綬章 坂神洋次生命農学研究科元教授 2012.5.9読売
- 吉村崇生命農学研究科教授はニワトリが朝を告げるとき最も強いオスが最初に鳴くことを突き止めた
2012.5.13読売
- 小田裕昭生命農学研究科准教授らの研究グループは不規則な食生活が肥満や糖尿病など生活習慣病につながる仕組み
を解明 2012.6.2毎日(朝刊) 他3社
- 大場裕一生命農学研究科助教は岡崎市蜚学校講演会「ホタルはなぜ光る？」で講師を務める
2012.6.18中日(朝刊)
- サイエンスカフェ「迫り来る世界の食糧危機—植物科学を利用した解決へのチャレンジ」開催：芦荻基行生物機能
開発利用研究センター教授が講師を務める 2012.6.23中日(朝刊)
- 農学国際教育協力研究センターが2000年から始めたカンボジアの農業教育支援を紹介 2012.6.27中日(夕刊)
- 中部の環境を考える会 第31回総会記念の集い開催：7月1日 福島和彦生命農学研究科教授が「今、何故バイオ
マスなのか」と題して基調講演 2012.6.28中日(朝刊)
- 名大カフェ "Science, and Me" 第24回「迫り来る世界の食糧危機—植物科学を利用した解決へのチャレンジ」開催：
7月4日 芦荻基行生物機能開発利用研究センター教授が講演 2012.6.29,30毎日(朝刊) 朝日(朝刊)
- 生源寺眞一生命農学研究科教授が協同組合について解説 2012.7.7中日(朝刊)
- 2012国際協同組合年・記念シンポジウム in 岐阜・愛知・三重開催：7日生源寺眞一生命農学研究科教授が講演
2012.7.8中日(朝刊)
- 生命農学研究科に次いで中部大学が愛知県農業総合試験場と協定を締結 2012.7.14中日(朝刊)
- くらしナビ：小田裕昭生命農学研究科准教授が肝臓時計とメタボリックシンドロームの関係について解説
2012.7.23毎日(朝刊)
- 研究現場発：吉村崇生命農学研究科教授が研究する季節繁殖について解説 2012.7.31中部経済(朝刊)
- 「ニッポンの食、がんばれ！セレクション」フォーラム開催：8月8日 生源寺眞一生命農学研究科教授が座談会
で「日本の伝統的な食品製造業が私たち日本人の伝統的な和食を支えている。ぜひ応援していきたい。」と話す
2012.9.5中日(朝刊)
- 中道範人生命農学研究科特任助教などのグループは植物の生理現象が起こる仕組みを解明
2012.10.2,3日刊工業 中日(朝刊)
- 佐藤豊生命農学研究科准教授などのグループがDNAの遺伝子情報が変化する仕組みの一端を解明
2012.10.4中日(朝刊)

「ニッポンの食、がんばれ！セレクション」受賞製品カタログ：生源寺眞一生命農学研究科教授が受賞製品によせてコメント 2012.10.14中日（朝刊）

東海経済討論：TPP 参加に賛成？慎重？生源寺眞一生命農学研究科教授 2012.10.21朝日（朝刊）

生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター設案フィールドが2013年3月で家畜類の飼育を終了 2012.11.23中日（朝刊）

経済課題を聞く：12衆院選④ 生源寺眞一生命農学研究科教授 2012.12.2読売

同窓会寄付者一覧

本年度、農学部同総会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。ありがとうございました。（敬称略）

旭 正	阿部 利徳	荒木（守田）光代	五十嵐（山本）学	伊藤 憲一
井上ありさ	今井 哲弥	今井 正樹	岩月 幸雄	大杉 徹
太田（小島）桂子	小野 知洋	片岡 順	加藤 隆博	加藤 猛雄
加藤 英和	加藤 正幸	金光 桂二	川村 悌弼	菊本 敏雄
北川 紀雄	栗本 重夫	小林 良一	齊藤 哲夫	澤木 良次
嶋崎 裕志	白石 典久	新海 義秋	杉浦 康生	鈴木 大地
生川 延平	仙石 三郎	蘇 智慧	高橋（山崎）登枝子	高見 浩
竹内平一郎	竹村 富男	竹谷 裕之	築山 孝弘	恒良 利男
寺本 昭二	徳田（安東）瑞子	中井 顕成	長坂 光司	中村 研三
並木 満夫	成瀬 和也	新美 安信	西嶋 能達	西村 弘行
長谷川靖彦	林 俊次	林 雅俊	曳地（平井）利枝	樋口 春三
日比野浩二	平島 昭和	平林 良一	広田 知敬	福井 敏夫
福田 綾	藤村 佳樹	船橋 隆夫	古田 隆則	細井（井上）力
松田 義夫	松本（金田）和子	馬淵 都子	水野 孝	水上（村上）優子
宮元 啓樹	村松けい子	山下 興亜	山下（水野）貴子	若森 薫熙
渡辺 広次	渡邊 徹			

事務局だより

事務局では農学部同窓会会員録データの改定を行っています。転居および転勤の際は、同窓会事務局（dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp）までご連絡ください。

今後とも会員の皆様からのご質問・ご要望にお答えしてまいりたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

全学同窓会について

名古屋大学全学同窓会は、卒業生だけでなく名古屋大学関係者すべてを構成員とする同窓会で、大学と社会の交流の核となり、国内にとどまらず国際的にも貢献することを目的としています。全学同窓会は、部局同窓会と連携しつつ卒業生、学生、教職員の交流の場を提供し、情報発信や人的交流、学術研究、教育及び学生の支援など全学的見地から様々な活動を行っています。

昨年度は、以下の活動を行いました。そのうち、主なものについて述べます。

(1) 全学同窓会設立10周年記念事業の実施

同窓会設立10周年を記念して、10周年記念誌を発行し、ホームカミングデイに全海外支部長を招へいして感謝状と記念品を贈呈しました。また、アカデミックガウンを披露し、ガウン及び角帽を名古屋大学に寄贈しました。

(2) 社会貢献人材バンクの名簿整備

大学の運営する「卒業生等名簿管理システム」の整備と運営に協力しました。

(3) 財政基盤整備

支援会員などの増強、同窓会カード会員の獲得、

ブラチナ American Express カード発行契約の締結、新入生に対して「活動協力金のお願い」を配布しました。

(4) 拠点形成

関東支部、遠州会、関西支部との連携・支援を行いました。また、新たな海外支部（ラオス）の設立と各支部（韓国、バングラデシュ、中国／上海、タイ国、中国／北京、ベトナム、カンボジア、モンゴル、ウズベキスタン、台湾）との連携を強化しました。

(5) 全学同窓会活動の運営基盤整備

総会・評議会の開催、部局同窓会、クラブ活動同窓会、企業内同窓会等との連携を強化しました。

(6) 学生支援

名大祭への協力、寄附講義「キャリア形成論」の支援を行いました。

(7) 大学支援

名古屋大学基金活動の支援、第8回ホームカミングデイの共催及び支援、大学支援事業の実施、国際交流活動の支援などを行いました。

(8) 広報活動

全学同窓会 Newsletter の発行と名古屋大学メールマガジンからの情報発信を行いました。

理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具

主要取扱メーカー

アズワン	三洋電機
東京理化	タイテック
旭硝子	日本エイドー
久保田商事	オートー
名古屋三立製作所	アドバンテック東洋

MZH

株式会社 **みずほ理化**

〒468-0066 名古屋市天白区元八事一丁目33番地
TEL 052-831-8800
FAX 052-834-4117
E-mail: mizuhorika@k2.dion.ne.jp

全国同窓会名簿作製・同窓会アドバイザー

SALAT
Salat Corporation

株式会社 サラト <http://www.salat.co.jp/>

本社 兵庫県姫路市北条宮の町172
Tel.079-284-1380 Fax.079-224-7746

コミュニケーションの進化に対応する

 株式会社 **クイックス**
URL <http://www.kwix.co.jp/>

印刷を核に情報産業を担う企業として、
新時代のコミュニケーションの輪を
拡げています。

■本社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL (0566) 24-5511 / FAX (0566) 26-0200
■名古屋本部 〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20
TEL (052) 871-9190 / FAX (052) 889-1410

農学部同窓会事務局では、広告の募集を
しております。本会報の発行部数は、現在
約7,900部で、本学農学部関係者に配布さ
れています。会社の広告、同窓会の通知な
どにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。